

「落語と私」 その参拾弍

三代目 橘ノ百圓

この処、東京の新型コロナの感染者数も、第2波の頂上を過ぎ、右肩下がりに成っています。終息に向っていると良いですネ。

前号は「昭和の名人と現在の噺家」と題して、私の想う4人の名人を紹介しましたが、現在の噺家を論ずる前に、是非とも書いておきたい3名を記したいと思います。

この3人も過去の人と成りました。もう少し長生きをしていれば、名人と呼ばれたと思うのですが、誠に残念です。

先ずは、十代目 ^{きんげんていばしょう} 金原亭馬生 皆様ご存知の通り、五代目 古今亭志ん生の長男として生れ、太平洋戦争真直中、昭和17年、父志ん生の門人と成り、翌18年、二ツ目付け出しで初高座、その後の流れは下に記します。



金原亭馬生（十代目）

出典：<https://search.yahoo.co.jp/>

十代目 金原亭馬生（本名 ^{みのべきよし} 美濃部清）

昭和3年1月5日生

昭和17年 志ん生に入門し昭和18年8月二ツ目 四代目

むかし家今松 - 昭和19年 初代 古今亭志ん朝 - 昭和22

年6月再び今松 - 昭和23年真打 古今亭志ん橋 - 昭和24

年10月十代目 金原亭馬生 昭和57年9月13日歿（54才） 法名（戒名）心光院清誉良観馬生居士

父志ん生の押しで二ツ目付け出しで初高座を務めました。間もなく志ん生が、満州慰問で日本を離れた為、周りから色々嫌な思いをさせられたとの話も聞いてます。又、当時は、それなりの若手が極少なかった為に、重い責任を感じ、芸が老け込んだ様で、苦勞は察しても余り在ると思います。父志ん生が亡くなって数年後、当時まだNHKラジオ放送が愛宕山に有った時分、その資料館で「志ん生を偲ぶ」と題した8ミリ？放映会が有りまして、その時、馬生師匠が父を語るで登壇したのですが、舞台傍らの数段の梯子を上るのに、弟子の手を借りていたのが印象的でした。晩年は、勇壮な「鞍馬」の出囃子から、ユックリとした父の出囃子「一調入り」に変わったのを覚えています。何ンとなく寂しさを感じました。馬生師匠と言えば“江島屋騒動”“お富与三郎”“名人長次”などの長編物の人情噺も素晴らしいですが“ざる屋”“五百羅漢”“鮑のし”の様な軽い噺も絶品で、寄席で演じている馬生師匠は、何故か明るく感じます。こよなく酒を愛した馬生師匠、昭和57年9月、皆さんに惜しまれながら、54才の若さで亡くなりました。実に残念です！

三代目 古今亭志ん朝 (本名 美濃部強次^{きょうじ}) 昭和13年3月10日 志ん生の次男として生れる。
昭和32年父志ん生に入門 古今亭朝太^{ちやうた} - 昭和34年3月二ツ目 - 昭和37年3月真打昇進三代目 古今亭志ん朝 (矢来町^{やらいちやう}の師匠) 平成13年10月1日歿 (63才) 法名 (戒名) 光風院楽誉観月志ん朝居士

五代目古今亭志ん生を父に、十代目馬生を兄に持つと言う恵まれた環境に育ち、物心がつく頃には一家の生活も徐々に豊かになり、兄の様な辛い思いは極少なかったと思います。三木のり平一座に名を置き、数多くの芝居に出演したり、若い頃から人気を博しておりました。30年以上前に八代目 雷門助六師匠を口説き落しませて「住吉踊り」の復興にも尽力して、毎年浅草演芸ホール8月中席での興業は、落語協会、落語芸術協会を跨いで、多くの芸人の参加で大当たりと成りました。

芸幅の広さは、昭和56年に始めた「志ん朝七夜」の根多から感じとってもらいます。初日 4月11日“大山詣り”“首提灯”2日目“百川”“高田馬場”3日目“代脈”“蔵前駕籠”“お化長屋”4日目“大工調べ”“甲府い”5日目“堀の内”“化物使い”“明烏”6日目“火事息子”^{ひなつぼ}“籬鏝”千秋楽4月17日“真田小僧”“駒長”“干物箱”以上17席、噺の一ツツに解説を付ける。紙面の余裕も在りませんので、皆様の知っている範囲でご判断ください。

古今亭志ん朝、男前と姿の良さ、口跡と噺の運びの上手さ、そして粋で鱗背^{いなきせ}で多くの人に愛される人柄、こういう噺家は二人として出て来ない様に思います。65才の若さで逝ってしまったのは、余りにも惜しいです。後20年生きた先の噺を聴きたかったです。

七代目 立川談志 (本名 松岡克由^{かつよし}) 昭和11年1月2日生 (師小さんと同じ誕生日) 昭和27年4月五代目小さん
に入門 柳家小よし - 昭和29年3月二ツ目 小ゑん - 昭和38年4月真打昇進七代目 立川談志 - 昭和58年7月協会離脱 立川流設立 平成23年11月21日歿 (75才)

法名 (戒名) 立川雲黒齊家元勝手居士

正に落語界の鬼才、その才能は溢れんばかり！自説の「落語は人間の業の肯定」を引ッ下げ、その活躍は目を見張るものが在りました。当時の報道関係者も、随分彼を追ッ掛けました。時代の寵児その者です。人間の心理を深く掘り下げた演出法を「己派^{おのれは}」と称して、落語の頂点を

一ツ気に駆け上がる感が在りました。私も落研現役時は大の談志最良で、相対する志ん朝好きな仲間達と激論を交したものです。50数年前の話ですが、志ん朝さんが自分を抜いて、抜擢真打に決った時、まだ二ツ目だった彼は、志ん朝さんに何ンと「この話は辞退しろ！」と迫ったそうです。無論、断われましたが、余程悔しかったのでしょネ。

根多は“やかん”“源平盛衰記”“堪忍袋”“野晒し”“人情八百屋”“芝浜”など多種多様ですが、私も“ねずみ穴”を聴いた時の衝撃は今でも覚えています。只、残念ながら談志師匠の個性が強すぎて、登場人物全て立川談志なのです。ゴメンナサイ。平成23年11月息を引き取る時に談志師匠ご自身、「俺は落語を極め



七代目 (自称五代目) 立川談志
出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

た!!」との想いは在ったのでしょうか!? ご本人に訊いてみたいです。

以上が、惜しまれつつ亡くなった3名です。これから「現在の噺家」に移ります。

先ず、絶対に外せないのが現落語界只一人の人間国宝十代目 柳家小三治師匠です。

十代目 柳家小三治 (本名 ^{こうりやまたけぞう} 郡山剛蔵)

昭和14年12月17日生

昭和34年3月五代目小さんに入門 柳家小たけ-昭和38年4月二ツ目 さん治-昭和44年9月真打昇進
十代目 柳家小三治 現在81才、元気にご存命ですヨ～！テな訳で、小三治師匠の芸について結論めいた事は書けません。まだこれから、どう変化をするかは未知数ですから、そこで、師の別な顔を記したいと思います。何しろ落語界一の多趣味で、その上凝り性、有名なのは単車、これは噺家仲間の自転車愛好会? から発展したもので、30年以上前に成りますが、何処へ行くにもホンダのナナハンを乗り回し、寒い時期は背中に「小三治」と書かれた革ジャンにヘルメット、北海道の定例会も、この出立で来場したとか!? 又、機械いじりも好きで、知り合いの腕時計の修理を請負い「ハイ、直ったヨ・・・部品が一つ残ったけど、これどうする」ですって。今はクスリに凝っている様で、毎日^{てのひら}掌一杯服用している様子です。これが長生きの秘訣ですかネ!? 落語に向う姿勢も真摯で、多くのお弟子さん(現8名)を育て、若手の育成にも力を入れております。小三治師匠、落語界の為にも、もっと長生きしてください。

そして、これから責任が重いのは(余計なお世話ですが) 柳家さん喬師匠、五街道雲助師匠、柳家権太楼師匠、瀧川鯉昇師匠(芸協)。若手で希望を託したいのが、柳家喬太郎師、桃月庵白酒師、春風亭一之輔師、古今亭文菊師、春風亭昇太師(芸協)。桂文治師(芸協)、三遊亭兼好師(円楽党)。その先に期待を寄せるのが、柳亭こみち、柳家わさび、二ツ目では、古今亭志ん吉、雷門音助(芸協)

ここに列記したのは、東京の落語界に籍を置いている人達で、飽くまでも私の主観です。無論！私は全ての噺家さんの高座を聴いている訳でも在りません。礼を失する様な事を書きましたら、前もってお詫び申し上げます。

昔「菊五郎バカ」と言うお爺さんがいまして、誰の芝居を観ても「六代目には敵^{かな}わネエ」そればかり、マァ嫌がられたと思います。私がここで書きたいのは「昭和の名人」と馬生、志ん朝、談志は過去の人、今を生きて、今を語る噺家を大事にして欲しいのです。若い人、中年の人、それぞれに、それぞれの想いで聴いて頂くのが一番です。10月号が届く頃には秋も深まり、静かな生活が送れる事を祈ります。コロナに負けるナ！